



● 巻頭エッセイ 次世代 ICT と教育 ..... 1

● 2013 年度勉強会「英語の教え方教室」報告 ..... 2

・ 第 22 回勉強会 ..... 2

・ 第 23 回勉強会 ..... 3

● 授業の玉手箱「聞く」と「聴く」..... 4

● 書籍紹介『特別支援教育—多様なニーズへの挑戦』..... 4

● 2013 年度授業デザインスキルアップ演習 ..... 4

● 勉強会「英語の教え方教室」今後の予定 ..... 4

**巻頭エッセイ**

**次世代ICTと教育：フューチャースクールで何が変わるのか**

東條 加寿子

「未来の教育を考える」エクスポ 2013 (注) に参加する機会を得た。デジタル教科書、電子黒板、タブレットPC等、最新のICT機器を教育の現場でどのように活用するかについての実践報告や提案に注意深く耳を傾けると、共通項として次世代型授業のキーワードが浮かび上がってきた。注目したのは「協働学習」と「21 世紀型スキル」である。

さて、私たちを取り巻く社会は今、まさにデジタルの時代である。物心ついたころから身の回りに当たり前のようにスマートフォンやタブレット端末がある時代の子どもたちのことを digital native と呼ぶそうだ。Digital native の子どもたちは、授業の中でタブレットPCを水を得た魚のごとく難なく使いこなす。これに対して、教師たちは世代的に digital immigrant である。デジタルの時代に何とか市民権を得ようと、懸命に技術革新の産物を使っている。中にはアナログからどうしても解放されない digital alien もいるかもしれない。興味深いのは、デジタル教科書、電子黒板 (IWB=Interactive White Board) やタブレットPCが小学校や中学校でより抵抗なく活用されていることである。低学年ではICTの特徴である視覚情報が効果をもたらすことやICT活用の学習規律を教師がコントロールしやすいことがその理由ともいえる。一方、高校になると、ネット社会の弊害がそのまま教員に持ち込まれるのではないかという懸念があり、タブレットPCの導入が抑制されているのは皮肉である。

国の施策としての「教育の情報化」は 2010 年に総務省の取り組みとして開始され、小学校・中学校における一人 1 台タブレット端末活用のフューチャースクール実証校で推進事業がおこなわれた。3 年間の取り組みは「教育分野におけるICT利活用推進のための情報通信技術面に関するガイドライン(手引書)2013」にまとめられている。一方、文部科学省は 2011 年より学びのイノベーションという形で教育の情報化促進に取り組み、今年が 3 年目となる。教育のインフラ整備を総務省が、教育のヒューマンインターフェイスを文部科学省が担当する格好になっている。そして、今年 6 月、ICTの利活用の裾野拡大を推進するための基盤の強化を目指した新たなIT戦略が閣議決定され、学校教育でのIT利活用による授業改革の実現のロードマップが発表された。今後、教育環境のIT化は国レベル、地方自治体レベルでますます推進されることになる。

具体的に、電子黒板やタブレットPCは授業でどのように活用できるのであろうか。比較的導入が進んでいる電子黒板は、デジタル教科書やオリジナル教材を提示したり、学びの過程を共有したり記録したりすることに用いられる。特徴は、音声、動画を含むマルチメディア対応であるということ。例えばデジタル教科書に組み込まれたフラッシュカードは、手作りのカードでは決して実現できない秒レベルの設定調整が可能である。また、電子黒板を駆使することによって、情報を提示・共有・焦点化して授業効果をあげることができる。一方、一人 1

台のタブレットPCは、主体的な個別の学習活動を保証する。同時に、タブレットPCは調べ学習やプロジェクト活動など、協働学習に最適である。調べたことをグループで共有したり、話し合って考えをまとめたりする過程で、画面上で個人またはグループ全体の思考を可視化すると学び合いが促進されるからである。この協働学習のプロセスこそが、「21 世紀型スキル」習得過程である。即ち、「21 世紀型スキル」で目指しているのは、主体的に考え、判断し、能動的に他者と関わり、表現し伝える力である。協働学習は、予め準備されている解を探るのではなく、他者との関わりの中で解を創り上げていくことを尊重するため、現代の知識基盤社会に必要なスキル獲得に資する学習スタイルである。

セミナーでは、MOOCと反転学習という最新の動きも紹介された。MOOCとは Massive Open Online Course の略であるが、アメリカの MIT (マサチューセッツ工科大学) やパークレーなどで 2000 年ごろから実践されてきた大学授業の公開 (OCW= Open Course Ware) にその起源をもつといってよい。米国の大学に端を發し世界中で進行する「教育のオープン化」は学びのスタイルを一気に変革したが、MOOCではさらに一歩進んで、誰でもコースに登録し、ウェブ上で授業を受け、課題を提出し試験を受け単位を取得することができる。ある人気の機械工学コースでは世界 16 カ国から 16 万人が登録し、最終的に 2 万人が最終試験を受けたという大きさ (massive) である。試験で満点を取得した 300 人の中には弱冠 15 歳のモンゴル人少年がいたとのこと。彼は、飛び級で現在MITの学生になっているそうだ。MOOCの授業内容は e-Learning によって個別学習に委ねられ、実際の授業時間は質問や実験といった活動に充てられる。そして、この方式は「反転授業」(flipped classroom) として注目を集め始めている。「反転授業」を英語の授業に当てはめてみると、従来教室で行ってきた日本語の説明や日本語訳は、授業外で解説動画を視聴させる e-Learning として課し、実際の授業では、英文の理解や確認、Q&A及び、定着活動に専念するといった具合になる。「英語の授業は英語で」を実質化する一つの授業スタイルといえるかもしれない。

おわりに、これまでICTをとりまく議論は、例えば、タブレットPCを導入するかどうかという是非論に終始していたが、今や論点はICTをどのように活用するのか、ICT活用によってどのような教育改革がもたらされるのかにシフトしている。次世代教育の中でITが環境の一部として位置づけられた証拠である。新しい教育環境の中で、学び合い教え合う協働学習を手段として 21 世紀型スキルを確実に身につけるために、ICTをどのように活用すればいいのか、教師の授業デザイン力がこれまでも増して求められることになる。

\*\*\*\*\*